The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	並河寒泉『辨怪』翻刻（一）
Author(s)	佐野, 大介
Citation	懐徳堂センター報. 2004, 2004, p. 95-103
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/24357
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『懐徳堂センター報』二〇〇四　（大阪大学大学院文学研究科・文学部懐徳堂センター　二〇〇四年二月二九日発行）

並河寒泉『辨怪』翻刻（一）

佐野大介

『辨怪』は、並河寒泉が妖怪変化・霊狐憑などの存在を否定することを目的として記した書物である。全体は「辨怪」・「破怪」・「吾庠先哲遺文」の三部より成り、さらに「辨怪」は「辨狐怪」・「辨談怪」・「辨信怪」の三篇、「破怪」は「詰破篇」・「窮破篇」・「自破篇」の三篇より成っている。本稿は、このうち「辨怪」部を翻刻したものである。

「辨狐怪」には、世間が「狐狸妖怪の事、懐徳堂之を辨ずる、明哲遺す無〔し〕。」と評していたことが記されており、また、寒泉自身も「吾〔が〕懐徳書堂の學、狐狸雑怪〔に〕於〔て〕、寸歩〔も〕迷〔ふ〕弗〔く〕、片言〔も〕容〔る〕弗〔し〕。」としているように、「無鬼論」は、自他共に認める懐徳堂を特徴づける思想の一つであった。『辨怪』は、懐徳堂最末期の教授である寒泉が、その無鬼論をまとまった形で記したものであり、懐徳堂無鬼論の構造や性質をよく示している。また、五井蘭洲・中井竹山・中井履軒・中井蕉園・中井碩果の無鬼論に関する言説や事績も収録していることから、懐徳堂無鬼論の系譜を示した資料としても高い価値を有する。さらに、本稿で底本として用いた大阪大学附属図書館蔵本は、寒泉の自筆本であり、墨にて訓、朱にて点が付されていることから、訓点資料としての価値も有する。

なお、『辨怪』の説明・書誌学的解説としては、矢羽野隆男氏「並河寒泉関係資料」（『大阪大学大学院文学研究科紀要　モノグラフ編』第四二巻―二、湯浅邦弘編、二〇〇二年）及び『懐徳堂事典』（湯浅邦弘編、大阪大学出版会、二〇〇一年）の「辨怪」の項があり、内容について論じたものとして、陶徳民氏「並河寒泉の社会政治観――『弁怪』と『居諸録』を中心に――」（『日本思想史学』第二〇号、一九八八年、後に『懐徳堂朱子学の研究』（大阪大学出版会、一九九四年）に収録）がある。

凡例

- 本稿は、並河寒泉『辨怪』のうち「辨怪（「辨狐怪」・「辨談怪」・「辨信怪」）」の翻刻である。
- 底本には並河寒泉の自筆本（大阪大学附属図書館蔵）を用いた。
- 底本にはかなりの俗字・或字が使用されているが、印刷の都合上、原則として全て正字に改めた。
- 底本の訓点資料としての価値に鑑み、訓点も翻刻した。
- 訓点は底本の形にできるかぎり忠実に従った。なお、上下点のうち、下点のみが付されており対応する上点を欠くなど、点を脱することが明らかな箇所も底本のままとした。送りがなの、「子」（ネ）・「丶」「く」（おどり字）「〆」（して・しめ）についても底本の表記に従った。
- 底本には、挿入の印として字間に朱で「○」を附加し、上部欄外に文字を記した箇所があるが、その文字は文字囲いにより示した。

・空格は「□」で示した。
・底本では分節していないが、通読の便のため一文を幾つかの節に分けた。
・一部語句には、注として出典と思われる箇所を示した。

※なお、訓点の特徴として、
・「丶」は一音の繰り返しを示す（例：「此、ニ」＝「ここに」など）。
・「〻」（おどり字）は漢字もしくは二音の繰り返しを示す（例：「唯〻」＝「ただただ」など）。
・「焉」が目的語となる場合は、かりがね点を省略する（例：「見焉」＝「焉を見る」など）。
などが見られる。

辨怪

大坂府學教授並河朋來亨先甫　撰

辨狐怪

泉州界府ノ商翁、有下祀ル稲祠ヲ於家ニ者上、翁疾ム、一日會ニ親戚ヲ曰、身ハ是レ家祠ノ靈狐也、主翁崇奉之厚キ、神爲ニ來リ報スル也、神聞ク汝等於ル翁ニ、交誼太タ疏、主翁今日之疾、職ハラ此レ之由ル、汝等自レ今賑卹以睦セハ、則翁ノ疾可レ瘥エ矣、乃令ニ連署以誓一焉、府ノ衛曹某聞キレ之ヲ、佛然攘ケテレ臂ヲ曰、何ニ等ノ愚老、妖誕敢爾ル、我其レ發摘服センレ之ヲ、弗レハ服セ則身首萬段、擇ニ取リ鋭刀ヲ一、奮然而往、翁見レハ某ヲ則卽チ指ニ其佩刀ヲ一曰、拙シ矣吏也、何ソ擇ニ於刀ニ一、此欲ニ以レ武屈セント予ヲ也ル一與、某愕貽憮然而去、翁又嘗言、不レ識ル字ヲ者、不レ足ニ與ニ語ルニ一、唯〻讀書之人、可キ與ニ語ルニ一已、有リ一學醫一往ク、叩ク和漢史上ノ事ヲ、翁應答如レ響ノ、或指ニ言フ其紙數ヲ一、醫驚服而去、一學士以ニ斯ノ話ヲ一語リ森孟宜一ニ、且曰、狐狸妖怪之事、懷德堂辨スレ之ヲ、明晰無レ遺ス、我モ亦學ニ程朱ヲ一者、則不ル敢ニ惑一也、然ニ聽ニ之ヲ於忠直之口一ニ、其惑ヒ有下ル未タ釋然タラ一者上、今也ヤ斯ノ話、親ク聽ニ諸ヲ界府ノ某一ニ、某也ヤ忠直不ル敢ニ惑一者、而面アタリ視テ談スレ之ヲ、是レ吾カ惑ヒ之所ル未タ釋然タラ一也、請質セ諸ヲ並河教授一ニ、孟宜以告、予危坐正ク襟ヲ曰、夫ノ爲ル學ヲ之務、以レ解ヲ惑ヲ爲レ要ト、況ヤ師タル於人一ニ者ヲ乎、己レ之惑ヒ且不レ解ケ、何ヲ以解ン人ノ惑ヲ、書ニ不レ云ハ乎、人ハ是レ萬物之靈、既ニ是レ萬物之靈、狐狸微獸何ソ爲ン、

爲レ學ヲ者、苟モ存ス心ヲ於此、ニ、雖レ有レ百怪談、復奚ソ惑ン、夫ノ何ソ信セン於忠直ニ乎、豈唯ク忠直、雖ニ君子者、予ハ則不ル信也、※程子辨スル怪ヲ之言ニ曰、於事上ニ一々理會セハ、則有ニ甚ンノ盡ル期、須下只ク於ニ學上ニ理會ス上、今也ヤ斯ノ談、妄誕不經不ル足レ辨スルニ、固ヨリ也、然ニ言ヘハ欲ト質サント之ヲ予ニ、則予レ不ル必律スルニ以セ程子之言ヲ也、能ク言テ辨スル妖怪ヲ者モ、亦聖之徒與、予レ何ソ辭セン、請備サニ辨セン之ヲ、

※書不云乎　「惟天地、萬物父母。惟人、萬物之靈。」(『尚書』泰誓)

※程子辨怪之言　「今日雜信鬼怪異說者、只是不先燭理。若於事上一一理會、則有甚盡期、須只於學上理會。」(『河南程氏外書』「附東見錄後」)

以レ予ヲ觀レ之ヲ、斯ノ翁姦黠可キ憎ム之甚キ者、阿紫何ソ知ン、蓋始ルニ之ヲ以シ妖謀ヲ、終ルニ之ヲ以シ愚弄ヲ、而一窮病實ニ爲リ其ノ欛柄、翁之窮病、欲スル仰ント給ヲ于親戚ニ者久、而計無キ所レ出也、幸ニ族人皆俗徒、狐妖ノ詐謀、於レ是、ニ乎出、乃知ル非ニ狐附クニ翁ニ、是レ翁附レ狐ニ矣、是レ非ニ始ルニ之ヲ以スルニ妖謀ヲ乎、族人既ニ受レ誓ヲ、狐之能事畢ル、妖謀無キ復所レ用ル也、會ク有ニ不ル招之客二人來ニ、翁黠瞳一注、卽チ謂フ此ノ徒モ亦易キ與ミシ耳、妖謀餘焰、可ニ以薰灼ニ矣、於レ是、ニ乎或指レ刀ヲ或論シ史ヲ、準的皆得ル、二客茫乎心醉ス、猶鯽魚之於ル灰汁ニ也、其妖謀足ニ益ク取レ信ヲ矣、是レ非ニ終ルニ之ヲ以スルニ愚弄ヲ乎、嗚呼一時ノ妖謀、始終圓備ス、其姦詐周子シ矣、可キ憎ム之甚、是假リ鬼神ヲ惑スレ人ヲ之徒也、罪不レ容レ誅ニ、夫ノ某氏、忠直其性也、不ル敢惑ニ者、恐クハ此レ客氣、而其中心ハ則信疑相半スル者也、以ニ其忠直客氣ヲ、與ニ彼レカ姦黠妖謀ニ、相比シ以鬪、其強弱胡ソ止ク一着、彼レ乘スルニ以シ狐妖之詐謀ヲ、此レ挾ムニ以スニ信疑之客氣ヲ、一場ノ對戰、片言未タ接セ、遽然遇ニ指レ刀ヲ之一喝ニ、頓ニ挫キ其ノ鋒ヲ、客氣忽摧敗ス、疑鋒鈍フリ而信鋒磨シ、卒ニ爲※ス城下之盟ヲ矣、於レ是、ニ一團ノ客氣、既ニ已ニ消沮ス、滿腹所レ存スル、只ク是レ一條ノ忠直而已矣、宜ク其信スルヲ之益ク固キ、何ソ不ニ敢惑ニ之有ン、若夫ノ

指刀論史之事、細察其情與言、則可知已、某氏、衛曹之武人也、武人而奮然攘臂往者、豈徒哉、擇刀之情、盎々乎面目呈露者、可想見已、況翁之姦黠瞳彩、爛然注射者乎、其論史也、翁素有此伎倆、而常深蔽藏也、商人嗜書者、往々有然者也、今也欲鼓狐術、却露其尾、乃曰、讀書之人、可與語、是翁所自言、伎倆有素、昭々可徵矣、復奚異、抑斯二者、適足以鼓舞其妖謀也、則斯二客者、不知不識、入其殼中也、豈翅二客、斯學士亦殆乎將入其殼中也與、予則鳴鏑一注、欲以厭勝妖翁之狐魅也、

※城下之盟　敗戦後に結ばされる屈辱的な講和。「大敗之、爲城下之盟而還。」（『春秋左氏傳』桓公十二年）、「城下盟、諸侯所深恥者也。」（同杜注）

辨談怪

既爲學士、著狐怪之辨、而餘意猶欲然、覺癢處手未及也、乃轉舵溯源、辨世人談怪信怪、兩弊有所由來、分爲二篇、以付其後、庶幾有補於提醒世之惑夢云、吾嘗聞之、見怪不怪、怪自壞、蓋見焉而怪者、十之九、見焉亦不怪者、厘々居其一、是談怪之頑弊、所由來也、夫怯夫之瞳、怪則頑然長和尚矣、不怪則圓首長燈耳、凡世之談怪者、靡〃如親見之然、叩之則皆得諸傳聞者也、詰其所由來、則虛誕已、或有言親見之者、窮之則亦猶圓首長燈也、程子所謂目病、是已、此見焉而怪者也、其怪之者、既目怪之、又心信之、而又口鼓之、以吐之於衆人之耳、是談怪之弊所由起也、其聞之者、左聲尚在耳、既口吐之

右ニ、一左一右之間、談脉漸浮大、寸而尺、尺而丈、緣飾簸弄、終至説箸爲棒也、於是談怪之弊、頑然而成、無他由聞焉而怪也、然則見焉而談者、既自惑、又惑人、其罪有餘、聞焉而談者、緣飾簸弄、其罪殆有甚焉者、可不愼乎、若夫見焉亦不怪者、目且不怪、矧心口乎、要在見聞兩不怪耳、不怪則已、既怪則宜窮而破之矣、既破之、談亦有所辨焉、何言談怪、人〃而如此、怪談或可黙消焉、

※程氏所謂目病　「假使實所聞見、亦未足信、或是心病、或是目病。」（『河南程氏外書』「附東見録後」）

或曰、見焉而怪者、如何而怪、曰迎之也、曰見焉亦不怪者、如何而不怪、曰不迎也、曰迎與不迎之形、何以言之、曰其迎之也、猶痴僧之蹂蟆也、其不迎也、猶舜水之遇刃客也、有僧夜歩庭、暗中踐物、履底軟潰、以爲蹂殺蟆也、恨悔弗措、已寢、蟆來訴冤、憤恨説盡、僧懇謝不已、夢覺、汗透衣背、待明往弔、則腐茄也、朱舜水之在江都也、昏夜雨行、有物、突擊其傘、舜水欹傘而視、不見、從容擎傘行、又擊、亦如初、再三而後止、還家閲之、傘有剣迹者三、蓋遇刃者於衢也、癡僧、滿腹唯怪、腐茄則爲蟆、舜水、滿腹無怪、刃亦不怖、嗚呼見焉亦不怪、聞焉亦不怪、斷然自破之者、天下能幾人、

辨信怪

天地之道唯至誠矣、無可容妖怪虚誕也、戴其天履其地、以成其誠者、人之道也、其方寸間、復奚容妖怪虚誕哉、人之爲誠、雖有淺深厚薄之不同也、天下億兆之衆、其孰不由斯、

道ニ、孝弟忠信之事ヲ人ニ、稼穡販粥之治ムル業ヲ、饑ユル之思ヒ食ヲ、渴ク之呼ヒ飲ヲ、熱シ而葛シ、寒ク而袍シ、喜ヘハ則笑ヒ、憂レハ則悲ム、莫キ適而非ル誠ニ也、然リ而其方寸間、信スル妖怪虛誕ヲ者、獨何ソ與、是レ無キ他也、誠失ヒ其養ヲ、而腐敗以出ル也、性之善也、失ヘハ其養ヲ則腐德矣、仁之腐也貪、義之腐也戾、禮之腐也奢、智之腐也姦、程子所レ謂フ、惡モ亦不レ可レ不ル謂レ性ト、是レ也、誠之腐敗モ、亦猶是レ也、然ラハ則誠之腐敗、何ニ者カ使ニ之ニ然、曰妄也、凡ソ養レ誠ヲ之要、用ユル之ヲ幼稚ノ日ニ、其功大ニ多、但ク妄以養レヘ之ヲ則腐壞ス、衆庶億兆之信スル怪ヲ、亦是レ妄已、蓋厭ヒ正ヲ喜フ奇ヲ、世之頑習、先入爲ル主ト、人之常情、當リ其稚心蒙昧之日ニ、既ニ進ルニ之ニ以ス狐狸雜怪之妄ヲ、喜ヘハ則戲ルニ之ニ以シ狐狸ヲ、啼ケハ則威スニ之ヲ以シ狐狸ヲ、笑フモ亦狐狸、怒ルモ亦狐狸、起臥行住、莫キ非ル狐狸ニ也、鎔スルニ之ヲ以シ喜奇ヲ之習ヲ、錮スルニ之ヲ以ス先入之情ヲ、於レ是、乎癡嬌腸內、既ニ胎ニ棲ス一狐狸ヲ焉、幽室昏庭、怯瞳所レ炤ラス、莫シ赤ノ匪ル狐ニ、莫シ黑ノ匪ル狸ニ、怯膽稚子、得ン不ル信シ且怖レ乎、信怖之腐誠、於レ此、乎熟ス、是レヲ謂ニ妄以養ト也、宜ヘ乎幼稚之日、而眞誠卒ニ腐敗ス矣、及ニ其長スルニ也、煽クニ之ヲ以シ厲鬼夜叉之妄ヲ、鼓スルニ之ヲ以スレハ天狗飛頭之誕ヲ、則夫ノ喜奇之習ヒ、先入之情、與ニ信怖之腐誠ニ、又滋ク熟ス、至リ老ニ竟ニ爲リ沈痼ト、不レ可ニ復救ヒ藥リス矣、嗚呼哀イ哉、衆庶億兆之信スル怪ヲ、其本源實ニ在ニ于此ニ矣、自レ非ル拔キ其本ヲ清スルニ其源ヲ、斯ノ病何ソ瘥ヘン

※方寸間　「既而曰、嘻。吾見子之心矣。方寸之地虛矣。」（『列子』仲尼）

※程子所謂　「有自幼而善、有自幼而惡。是氣稟有然也。善固性也、然惡亦不可不謂之性也。」（『河南程氏遺書』「端伯傳師說」）

衆庶億兆、少ニ長スル于怪誕之間ニ者、姑ク舍レ旃ヲ、夫ノ以レ儒ヲ命スル家ニ者、其所ハ學則鄒魯正經、其所ハ由則洛閩宗學、日夕所レ求、莫キ非ル養レ誠ヲ之事ニ也、則拔キ本ヲ清フスル源ヲ之要、將ニ於レ此、乎在ント、然ニ至レハ於信スルニ怪ヲ、

則亦猶不レ異ナラ二於衆庶億兆一矣、是レ可キ怪ム之甚キ者、其諷スル書ヲ也、魯經ハ則有二四十不※レ惑、及ヒ不※ル語レ怪ヲ焉、鄒經ハ則有二不※レ動レ心、與レ養※レ氣ヲ焉、是レ皆養レ誠ヲ之教也、則延キ徒ヲ聚メ生ヲ、稠人廣坐、說一與シ之ヲ、而及ハ二其燕居談笑一、則語リ二狐狸雜怪一ヲ、喜意得〃然、靦ト不レ搖二鼻端一ヲ、鼓シ舌ヲ詡談シ、又從ヒ而怖ル之ヲ、自レ旁觀レ之ヲ、其顏容蚩〃、不レ異ナラ二於癡人說ニ夢ヲ、與二平素說レ經ヲ、判ト若二兩人一ノ、其矛盾支吾、何ソ一ニ至二於此一、是レ知ル其日夕養レ誠ヲ之學、亦從ヒ而腐敗スル也ル已、凡ソ讀書之人、自二衆庶億兆一觀レハ之ヲ、則瞻仰以爲レ賢ト爲二斗山一、片言隻辭モ、亦皆信ス之ヲ、況ヤ老師宿儒ヲ乎、然リ而其人若レ此、是レ播コス二腐誠一ヲ於衆庶億兆一也、妄モ亦大甚シ、拔キ本ヲ清スル源ヲ之要、其レ安クニ在ル哉

嗟夫、九原※可キ起ス、鄒魯ノ兩夫子、其レ謂ン之ヲ何ト、可キ不ル二慚チ且懼レ一乎哉、

※四十不惑　「四十而不惑」（『論語』爲政）

※不語怪　「子不語、怪力亂神。」（『論語』述而）

※不動心　「孟子曰、否、我四十不動心。」（『孟子』公孫丑上）

※養氣　「我善養吾浩然之氣。」（『孟子』公孫丑上）など。

※九原可起　死者を起こすこと。「九原」は墓地の意。「晉卿大夫之墓地在九原」（『禮記』檀弓下「以從先大夫於九京也」鄭注）

然ラハ則拔キ本ヲ清スル源ヲ之要、卒ニ不ル可レ得與、曰、否〃、先ツ自レ隗始メン、吾懷德書堂之學、於二狐狸雜怪一、寸步弗レ迷、片言弗レ容、衆※楚人咻フス之ヲ、※咳ト如二充耳一ノ、觀二世之信スル怪ヲ者一ヲ、實ニ不レ勝ヘ二恨嘆一ニ、吾カ庠ノ先修發シ二憤ヲ乎此一、勃然曰、童牛可二以告一ス矣、※文王之政、且自ス二寡妻兄弟一、乃恆ニ戒テ二家人一ヲ曰、爲二予カ兒一者、啼笑喜怒、勿レ乘スルニ以二狐狸雜怪一ヲ、必欲スル懲二艾セント其啼怒一ヲ、宜レ言二父母其レ呵責一スト、亦足二以誨ルニ兒ヲ矣、汝等其レ戒ヨ之ヲ、是ヲ以閨閤之內、老少婦女、羞チ談スルヲ二狐狸一、※屮角童孺、嗤ケル說クヲ二厲鬼天狗一ヲ、矧ヤ巫覡符章絕ツヲ二於言議一ニ乎、顏之推先ツ獲二我カ心一ヲ者也、內庭且然リ、況ヤ外舍問レ業ヲ者ヲ乎、庠之內外靡然成二斯ノ風一ヲ、百一有一餘一

年于今矣、則拔本清源之要、庶乎弗畔矣、本源已拔清、養誠之教、隱然存焉、斯風業已試之家、兆可以行、舉而錯之、家傚戶慣、推而國、而天下、衆庶億兆、豈不靡然成風乎、斯民也、※磯盧已降、所以直道而行也、斯風也、果遍布乎、普天率土、雖復欲容妖怪虛誕、得乎、則衆庶億兆、方寸間一塊腐誠、化而爲眞、所謂自明而誠者有焉、抑家傚戶慣之教、誰其尸之、豈有他哉、以儒命家者、在先自爲之也、今也※國家文教之治、以儒命家者、府下比屋相接、經史之業、日出而作、日入而息、是誰之澤與、微衷當欲以添涓滴於河海耳、何止餬口一路而然哉、然則晨諷夕誦、何爲也、修己也、治人也、所以養誠也、所以裨補文教也、於是儒名始可以命家矣、衆庶億兆、可以矜式矣、然後其教以成、吾庠之設、最可以裨補□國家文教者、是以吾先修奉其德意、欲下揭正學以養斯誠也、今也鳳來、淺學固陋不自揣、兼乏教授、※狗續其緒、則不敢失墜先志、欲以自修治人也、若此篇、不厭吻〃、紙盡而筆不休者、亦唯冀有裨補於□國家文教耳、若夫鄒魯洛閩之學、豈敢言得焉、但既已以儒命家、則辨怪一事、雖不足使衆庶億兆傚慣、所異於衆庶億兆者、則髣髴乎有得云爾、

※衆楚人咻之　環境の影響が大きいことのたとえ。「一齊人傅之、衆楚人咻之、雖日撻而求其齊也、不可得矣。」（『孟子』滕文公下）

※褎如充耳　「褎如充耳」（『毛詩』邶風、旄丘）「箋云、充耳塞耳也。言衛之諸臣顏色、褎然如見塞耳無聞知也。人之耳聾恒多笑而已。」（同鄭箋）、「褎多笑貌。充耳塞耳也。」（同『詩集傳』）

※文王之政　「刑于寡妻、至于兄弟、以御于家邦。」（『毛詩』大雅、思齊）

※丱角　男の子の髪型。「丱」とは左。「三月之末、擇日剪髮爲鬢、男角、女鬟、否則男左女右（傍点引用者）。」（『禮記』內則）

※顏之推云云　『顏氏家訓』教子第二や、「吾家巫覡禱請、絕於言議、符書章醮亦無祈焉、並汝曹所見也。勿爲妖妄之費。」（『顏氏家訓』治

家第五）などを指したものか。

※磯盧　「磯馭盧島（おのころじま）」の略。「其矛鋒滴瀝之潮、凝成一嶋、名之曰磯馭盧島。」（『日本書紀』巻一、神代上）

※一箇所「國家」の上の空格を欠くところがあるのは、底本では行頭に当たっていたため。

※狗續　つまらぬものが立派なものに続くことのたとえ。「時人爲之諺曰、貂不足、狗尾續。」（『晉書』趙王倫傳）

（本研究科助手）